

埼玉県熊谷市南方遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

南 方 遺 跡 Ⅱ

2014

埼玉県熊谷市南方遺跡調査会

埼玉県熊谷市南方遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

みなみ かた い せき
南 方 遺 跡 II

2014

埼玉県熊谷市南方遺跡調査会

序

私たちの郷土熊谷は、関東随一の大河川である利根川と荒川の2大河川に育まれた肥沃な沖積低地と、台地・丘陵地からなる変化に富んだ豊かな自然が広がっております。

こうした自然環境のもと、市内には先人たちによって多くの貴重な文化財が営々と築かれてきました。これらの文化財は、地域の歴史・文化を伝えるばかりでなく、郷土の発展やその過程を物語る証しであるとともに、私たちの子孫の繁栄の指標ともなる先人の貴重な足跡であります。私たちは、このような文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市形成のための礎としていかなければならないと考えております。

本書は、平成24年度に発掘調査を行った、千代地内に立地する南方遺跡について報告するものであります。遺跡からは、中世から近世にかけての館跡に関連する建物跡や溝跡が確認され、多大な成果を得ることができました。

本書が埋蔵文化財保護ならびに学術研究の基礎資料として、また埋蔵文化財の普及・啓発の資料として広くご活用いただければ幸いと存じます。

最後になりますが、発掘調査及び報告書刊行に至るまで、文化財保護法の趣旨を尊重され、ご理解ご協力を賜りましたエヌテック株式会社、ソフトバンクモバイル株式会社、並びに地元関係者の皆様に厚くお礼申し上げます。

平成26年3月

熊谷市南方遺跡調査会

会 長 野 原 晃

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市千代441番6に所在する南方遺跡（埼玉県遺跡番号65-016）の発掘調査報告書である。
- 2 本調査は、携帯電話無線基地局電波塔建設に伴う事前記録保存のための発掘調査であり、熊谷市南方遺跡調査会が実施した。
- 3 本事業の組織は、第I章3のとおりである。
- 4 発掘調査期間は、平成25年1月15日から1月28日までである。
整理・報告書作成期間は、平成25年11月5日から平成26年3月25日までである。
- 5 発掘調査および本書の執筆・編集は、森田が行った。また、熊谷市教育委員会社会教育課職員の支援を受けた。
- 6 発掘調査の現場写真および遺物の写真撮影は、森田が行った。
- 7 本書にかかる資料は、熊谷市教育委員会で保管している。
- 8 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関などからご教示、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。

（敬称略、五十音順）

上杉 正 埼玉県教育局市町村支援部生涯学習文化財課 熊谷市教育委員会

凡 例

本書における挿図指示は次のとおりである。

- 1 遺構挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のは個別に示した。
遺構全測図…1/80 小竪穴状遺構・溝跡・掘立柱建物跡・柱穴列…1/60 ピット…1/30
- 2 遺構の略記号は、次の通りである。
ST：小竪穴状遺構 SK：土坑 SD：溝 SB：掘立柱建物跡 SA：柱穴列
P：ピット
- 3 遺構挿図中、断面図に添えてある数値は標高を示している。
- 4 遺物挿図の縮尺は、原則として次のとおりであるが、それ以外のは個別に示した。
土器…1/4 鉄製品…1/2 石製品…1/2 石器…1/1
- 5 遺物拓影図のうち、土器は向って左側に外面、右側に内面を示した。
- 6 遺物観察表の表記方法は次のとおりである。
法量の単位はcm、gである。()が付されるものは推定値、現存値を表す。
焼成は、以下の3段階に区分した。
A…良好 B…普通 C…不良
胎土は、土器に含まれる鉱物等を以下の記号で、含有量の多い順に示した。
A：白色粒子 B：黒色粒子 C：赤色粒子 D：褐色粒子 E：赤褐色粒子 F：白色針状物質
G：長石 H：石英 I：白雲母 J：黒雲母 K：角閃石 L：片岩 M：砂粒 N：礫
- 7 写真図版の遺物縮尺はすべて任意である。
- 8 土器胎土の色調は、第一合成株式会社製SCR-1で測定し、マンセル値で示している。

目 次

序		2 周辺の歴史的環境	5
例 言		Ⅲ 遺跡の概要	8
凡 例		1 立地と調査履歴	8
目 次		2 遺構と遺物の概要	11
I 発掘調査の概要	1	Ⅳ 検出された遺構と遺物	13
1 調査に至る経過	1	1 遺構と遺物	13
2 発掘調査・報告書作成の経過	2	2 遺構外出土遺物	21
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2	V 調査のまとめ	28
Ⅱ 遺跡の立地と環境	3	引用・参考文献	29
1 遺跡の地理的概要	3		

挿図目次

第1図 埼玉県の地形図	3	第9図 第1・2号掘立柱建物跡	17
第2図 江南台地・比企丘陵地質概略図	4	第10図 第2号掘立柱建物跡断面図	18
第3図 周辺中世遺跡分布図	6	第11図 柱穴列	20
第4図 周辺の地形と遺跡	9	第12図 ビット平面図	22
第5図 調査地点と館全体図	10	第13図 ビット配置図・断面図(1)	23
第6図 全測図	12	第14図 ビット断面図(2)	24
第7図 小竪穴状遺構・土坑	13	第15図 ビット断面図(3)	25
第8図 第1・2号溝跡	15	第16図 出土遺物	27

挿表目次

第1表 周辺中世遺跡一覧表	7	第4表 第2号溝跡出土遺物観察表	21
第2表 周辺遺跡一覧表	9	第5表 遺構外出土遺物観察表	21
第3表 第1号溝跡出土遺物観察表	21	第6表 ビット計測表	26

図版目次

- | | | | |
|------|--|------|---|
| 図版 1 | 航空写真（平成4年11月21日撮影） | 図版 5 | 第1号掘立柱建物跡（西より）
柱穴1～6 |
| 図版 2 | 調査区全景（南より）
調査風景（南より） | 図版 6 | ビット群完掘状況（北西より）
作業風景
表土剥ぎ作業状況
付近に残る塚
付近に残る土塁と堀 |
| 図版 3 | 第1号溝跡・第1号柱穴列完掘状態（西より）
第1号溝跡・第1号柱穴列完掘状態（東より）
第2号溝跡・第2号柱穴列完掘状態（東より）
第2号溝跡・第2号柱穴列完掘状態（西より） | 図版 7 | 遺構・遺構外出土遺物 |
| 図版 4 | 第1・2号溝跡完掘状況（西より）
第2号溝跡土層堆積状況（西面）
第2号溝完掘状況（東より）
第1号小竪穴状遺構
第2号小竪穴状遺構 | | |

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

平成24年3月15日付けでエヌテック株式会社 代表取締役 永沼武志氏より携帯電話無線基地局電波塔の建設に係る埋蔵文化財発掘の届出が提出され、埋蔵文化財の所在及び取扱いについて協議があった。建設予定地は、南方遺跡に該当することから、熊谷市教育委員会では、平成24年5月1日に所在確認調査を実施した。調査の結果、現地表化60cmで中世の溝跡が確認された。この結果を踏まえ、平成24年5月9日付け文書にて、熊谷市教育委員会よりエヌテック株式会社 代表取締役 永沼武志氏あてに次のように回答した。

建設予定地は、埋蔵文化財包蔵地（南方遺跡）に該当する。当該地は、現状保存を行うか、埋蔵文化財に影響の及ぼさない方法での開発が望ましい。やむを得ず現状変更する場合には、事前に記録保存のための発掘調査を実施すること。

その結果、保存策について協議を重ねたが、工事計画の変更は不可能である判断されたため、記録保存の措置を講ずることとなった。平成24年8月15日付で埋蔵文化財に関する協定を事業主と締結した上で、平成24年8月31日に熊谷市南方遺跡調査会を設立した。

発掘調査は、平成25年1月15日から1月28日にかけて実施した。

発掘調査にかかる事務は、平成24年9月5日付けで文化財保護法第93条第1項の規定に基づく埋蔵文化財発掘の届出が、改めてソフトバンクモバイル株式会社 モバイルネットワーク本部東京技術統括部 基地局建設部 部長吉川 充氏より提出され、熊谷市教育委員会は副申を添えて埼玉県教育委員会教育長へ送付付した。これに対し、平成24年9月26日付教生文第5-674号で発掘調査実施について指示通知があった。

熊谷市南方遺跡調査会会長は、文化財保護法第92条1項の規定に基づく発掘調査の届出を平成24年9月19日付け熊南遺第2号で提出し、熊谷市教育委員会は副申を添えて埼玉県教育委員会教育長へ送付した。これに対し、平成24年9月28日付け教生文第2-37号で発掘調査について通知があった。

2 発掘調査・報告書作成の経過

(1) 発掘調査

発掘調査は、平成25年1月15日から同年1月28日まで行った。調査面積は約144㎡である。1月15日に重機による表土除去作業を行い、1月16日より作業員による遺構発掘作業と遺構平面図を作成し、1月25日に完掘写真の撮影を行った。1月28日には現場の埋め戻し作業を終了し、機材等を撤収して現場における作業を終了した。取り上げた埋蔵物は、平成25年2月1日付けで熊谷警察署へ発見届を、平成25年2月13日付けで埼玉県教育委員会へ埋蔵文化財保管証を提出した。

(2) 整理・報告書作成

整理作業は、平成25年11月5日から平成26年3月25日まで実施した。

まず、遺物の洗浄、注記、接合、復元作業を行った。その後、遺物の分類を行い、実測作業を開始した。また、これらと並行して遺構の図面整理を行った。

次に、土器等の遺物のトレース・拓本を採り図版を作成し、併せて遺構等のトレース・図版の作成を行った。そして、遺構の写真整理・遺物写真撮影を行い、写真図版の割付をした。また、これと並行して原稿執筆を行った。

最後に、印刷業者の選定を行い、校正を経て3月25日に本報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

発掘調査、整理・報告書作成

主 体 者	熊谷市南方遺跡調査会
会 長	野原 晃 (熊谷市教育委員会教育長)
副 会 長	鯨井 勝 (熊谷市教育委員会次長)
理 事	菅谷浩之 (熊谷市文化財保護審議委員会会長)
理 事	小野美代子 (熊谷市文化財保護審議会委員)
監 事	正田知久 (熊谷市教育委員会教育総務課長)
事務局 長	岩上精純 (熊谷市教育委員会社会教育課長)
事務局次長	根岸敏彦 (熊谷市教育委員会社会教育課担当副参事)
統括調査員	森田安彦 (熊谷市教育委員会社会教育課副課長兼文化財保護係長)
調 査 員	吉野 健 (熊谷市教育委員会社会教育課文化財保護係主幹)

II 遺跡の概要

1 遺跡の地理的環境

今回報告する南方遺跡は、荒川中流域右岸の江南台地上に所在する。熊谷市域の荒川右岸は、地形的に和田川以南の比企丘陵、和田川と和田吉野川に挟まれた江南台地、和田吉野川と荒川に挟まれた沖積地の3つの地形に区分することができる(第1・2図)。

比企丘陵は、外秩父山地から東方に半島状に突き出した丘陵であり、北部は江南台地、南部は東松山台地、東部は吉見丘陵に接している。丘陵内では、高根山(標高105m)、二宮山(標高132m)、大立山(標高113m)など標高100m前後の山が丘陵西半分の地域に分布して、突出した地形をつくっているが、全体的には100m以下の丘陵地形となっている。本丘陵は、地質学的には新生代第三紀層に相当し、礫岩・砂岩・泥岩・凝灰岩等の互層によって構成されている。層序は、下位より、前期中新世に属する七郷層(凝灰岩質で緑色変質が特徴。層厚830m以上)、中期中新世に属する小園層(粗粒砂岩を主体とし、礫岩・泥岩・凝灰岩を伴う。層厚300m)、荒川層(砂岩・泥岩の互層で、下部に礫岩を伴う。層厚350m)、土塩層(砂質泥岩を主体とし、砂岩・凝灰岩を伴う。層厚300m)、後期中新世に属する楊井層(礫岩を主体とし砂岩・凝灰岩を伴う。層厚300m)となり、これらの中新統を不整合に覆って更新世に属する物見山礫層が分布している(比企団体研究グループ:1991)。滑川町福田周辺から産出される通称「福田石」と呼ばれる斜長流紋岩質凝灰岩、熊谷市小江川周辺から産出される通称「小江川石」と呼ばれる白色細粒凝灰岩は、古くは周辺地域に分布する古墳石室石材として利用されている。

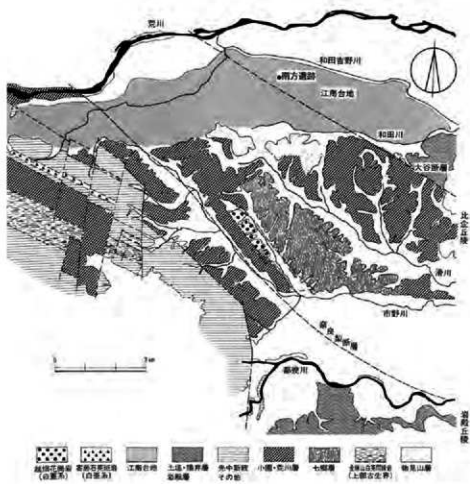
江南台地は、寄居町金尾付近より熊谷市に至る東西17km、南北3kmにわたる幅狭な洪積台地である。江南台地は、台地の基盤となる荒川中段段丘の発達した第三紀層上に秩父古生層(層厚8~20m)の上



第1図 埼玉県の地形図

に、川本粘土層とされる灰白色の粘土層（層厚2～5m）、下部を新期ローム層（層厚1～2m）に、また、上部を南関東の立川ローム層に対比されている大里ローム層と称されているローム層（層厚1～2m）が堆積し、表層に腐植土が載っている。台地の海拔高度は、上流の寄居町木持付近で140m、深谷市上本田付近で80m、台地末端にあたる熊谷市楊井付近で45mとなり、下流方向に次第に低くなっている。台地の北・東側は、荒川およびその沖積地に面し、比高差10～15m程の崖線で画され、崖線下には和田吉野川が流れている。台地上には平地林が発達し、狭小な開析谷や埋没谷が複雑に入り組み、その最奥部および開口部には溜池が築かれており、独特の自然景観を醸し出している。

荒川沖積地は、荒川の氾濫原で、江南台地下部を東流する和田吉野川以北に広がり、部分的に下位段丘は、深谷市畠山から熊谷市三本付近まで見られ、これより下流では沖積地へ埋没していると考えられている。沖積地との比高差は1m前後で、段丘礫層で構成されており、ローム層に被覆されていない。沖積地は、現在土地改良が行われ、穀倉地帯となっており、その中に自然堤防状の微高地が点在し、集落が存在している。標高46～34m、荒川との比高差9～12mを測る。



第2図 江南台地・比企丘陵地質概略図（比企団体研究グループ：1991より）

2 周辺の歴史的環境

次に、南方遺跡周辺における中世の歴史的環境について概観する（第3図）。

鎌倉期は、畠山重忠（1164-1205）の領地内に属していたと考えられ、重忠滅亡後は、新田氏の一族岩松氏の領地に組み込まれ、村岡には商業の中心である市があり、古代道路もこの付近を通っていた。時宗第二祖真教（1237-1319）が浅堤（千代）に來歴した南北朝期の頃には、莊園地名が文献上確認される。南北朝期から室町時代の周辺地域は軍陣の往来が活発で、時には前線となり戦場にもなっている。戦国期には、領地名として村々の名が文献上確認できるが、居館跡の主の名は伝わっていない。

宗教・信仰にかかわる遺跡として、天神谷塚群（13：千代遺跡群発掘調査会：1993）・金胎寺跡（14：久保遺跡内 江南町：1995）・鹿嶋遺跡（19：立正大学：1983）、深谷市百済木遺跡（8：川本町遺跡調査会：2003）・諦光寺廃寺が確認されている。

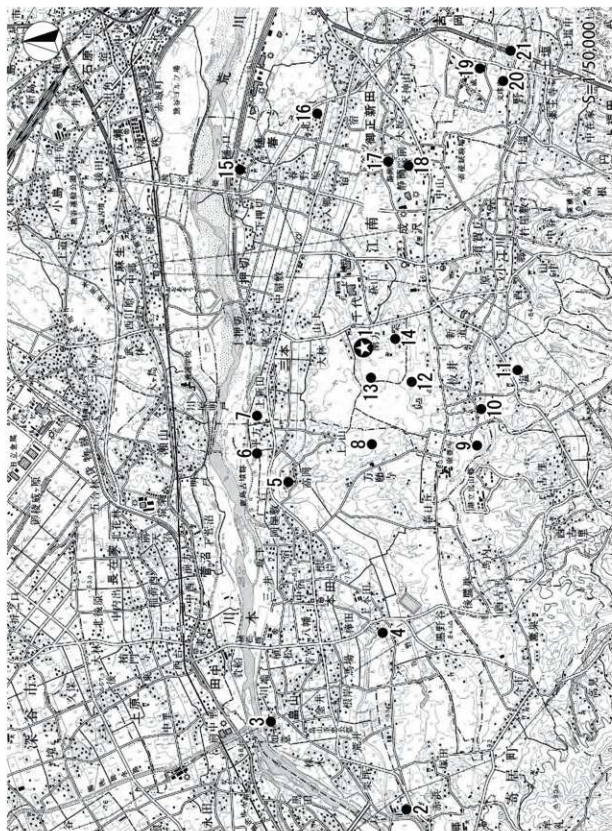
天神谷塚群では、十三塚の一部と考えられる4基の塚群が確認されており、13世紀の常滑の甕片が採取されている。金胎寺跡は、明治初年の廃仏毀釈によって廃寺となった、天台宗の柴山八幡院金胎寺が所在した場所で、五輪塔・宝篋印塔が確認できるが、詳細は不明である。鹿嶋遺跡では、土壇墓が確認されており、人骨の一部、銅環、数珠、銭貨が出土している。百済木遺跡では、2重の濠に囲まれた墓域・地下式墳・竪穴住居跡・土壇群・掘立柱建物跡などが確認されており、14世紀～15世紀にかけて機能した中世寺院と推測されている。

中世墳墓は、新田裏遺跡（7：江南村：1972）、宿遺跡（16：江南町：1995）、合羽山遺跡（18：熊谷市合羽山遺跡調査会：2009）、立野遺跡（9）、深谷市鹿島遺跡（6：埼玉県教育委員会：1972）、舟山遺跡（5：埼玉県教育委員会：1980）で確認されている。

新田裏遺跡は、東西16m、南北13m、高さ1.3m程の塚が確認され、火葬骨が埋葬された板碑群が出土している。宿遺跡では、集石墓・火葬跡が12基確認され、板碑・銭貨が出土している。合羽山遺跡は、板碑を伴う集石墓1基が確認され、緑泥片岩製蓋石下の土壇からは12世紀末に比定される湿美産の蔵骨器が出土している。立野遺跡では、地下式墳・土壇墓・井戸跡で構成される墓域が確認されており、五輪塔・板碑・茶磨等が出土している。舟山遺跡は、扁平河原礫とともに古瀬戸瓶の蔵骨器及び板碑が出土しており、13世紀～14世紀にかけての板碑を伴う火葬墳墓があったと推定されている。鹿嶋遺跡からは、東西16m、南北13m、高さ1.3mの塚の頂部から配石を伴う板碑群が発見されている。台石が整然と並べられ、台石下に伴う土壇からは、火葬骨が出土している。

館跡としては、深谷上杉氏との関係が傳承されている上杉館跡（1：南方遺跡内）・成沢館跡（17：静簡院遺跡内 江南町：1995）、谷縁館跡（12：中島遺跡内 江南町教育委員会：2002）、常安寺館跡（11：江南町教育委員会：1989）、平山館跡（15：江南町：1995）、増田館跡（20：元境内遺跡内）が確認されている。深谷市内では、畠山館跡（3：川本町遺跡調査会：1999・2003）、本田館跡（4：埼玉県歴史資料館：1985・川本町遺跡調査会：2003）が確認されている。

成沢館跡は、深谷上杉家当主上杉憲盛（1530-1575）の居館跡で、後に静簡院を創建したと伝えられる。現在、寺院の北側に高さ1m程の土塁が20m程確認できる。境内には中世の五輪塔が確認される。谷縁館跡は、館跡の全景は不明であるが、北辺で、幅7.2m、高さ1.2m程の土塁と堀が、東西方向に



第3図 周辺中世遺跡分布図

62m程の長さで確認されている。この北辺の土塁から南側へ2本の土塁が40mの間隔を置いて延び、西側は80延びて西に折れ、内郭を巡っている。この土塁の東側100m程の地点にも土塁と堀が確認されており、館の規模はさらに広がるものと推測される。常安寺館跡は、現状で北側と西側の土塁と堀が確認される。北側の土塁は、幅3m、高さ1m程で、東西方向に45m延び、「L」字形に南に曲がり、南端で一辺4m、高さ1.8mの土壇状になっている。北側土塁の中央に、元享年間・貞和元年・文明年間紀年銘板碑と、宝篋印塔が建てられている。平山館跡は、天正年間に深谷上杉氏の家臣新井豊後守が居住し、その子志摩守に引き継がれたとされている。北辺に50m、東辺に80m程の土塁と堀が残る。北側土塁に延慶4年(1311)紀年銘の板碑が建てられていた。増田館跡は、古河公方の家臣である増田四郎重富が居住したと伝えられている。内郭西側の堀は、幅4.5m、深さ0.8m、直線が110m程が残り、外郭は、北側と西側に土塁と堀が残り、土塁は、幅5m、高さ0.5m程、堀は幅5m、深さ2m程で、北辺で320m、西辺で230m程が残存している。内郭の堀と外郭の堀の一部が調査されており、板碑・五輪塔・宝篋印塔・銭貨・陶器片等が出土している。畠山館跡は、6次に渡り調査が行われており、石組墓からなる墓域や、館を囲む葉研堀、大形五輪塔、石組井戸などが確認され、鎌倉時代から室町時代にかけての代表的な平地式の中世館と確認されている。葉研堀の北側からは大型礫を組んだ12世紀後半の火葬墓が検出されている。本田館跡は、畠山重忠の主従と伝えられる本田二郎親常に由来すると伝えられ、東西125m、南北150mの長方形を呈する堀と2重の土塁で構成された方形館と推定されている。

館跡の大半は、規模が一辺100m方形程で、防衛的な機能はあまり高くなく、日常の居所として倉庫や隸属民の小屋等が配置されていたものと推測される。増田館は、中心部に一町程の方形堀が巡り、外郭には400m×300m以上の堀と土塁が巡っており、大部隊が一時的に駐屯する陣所と推測されている。南北朝期から長享の乱までの間に、近接地の村岡に陣所が設営されており、その本陣または後陣というべき位置にあったものと推測されている。

集落跡としては、竪穴住居跡と推定される方形竪穴遺構が谷録館跡(12:江南町教育委員会:2002)・熊野遺跡(21:埼玉県遺跡調査会:1974)で確認され、15世紀に属する遺物が出土している。岩比田遺跡(10:岩比田遺跡調査会:1983)からは、柱穴・井戸跡が確認されており、板碑・ヒョウタン製保存用具が出土している。

また、寄居町では赤浜天神沢遺跡(2:寄居町教育委員会:1997)で、鎌倉街道上道と推定される道路遺構が確認されている。

この他特筆される事項として、江南地域では現在知られている板碑の中で、最も古い年号をもつ嘉祿三年(1227)銘の陽刻阿弥陀三尊像板碑をはじめ、安貞2年(1228)銘阿弥陀一尊種子板碑、寛喜2年(1230)銘陽刻阿弥陀三尊像板碑が発見されている。鎌倉時代初期から信仰心の篤い、有力武士が居住していたことを示す資料として重要である。

第1表 周辺中世遺跡一覧表

No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名	No.	遺跡名
1	南方遺跡	6	鹿嶋遺跡	11	常安寺館跡	16	宿遺跡	21	熊野遺跡
2	赤浜天神沢遺跡	7	新田裏遺跡	12	谷録館跡	17	成沢館跡		
3	畠山館跡	8	百済木遺跡	13	天神谷塚群	18	合羽山遺跡		
4	本田館跡	9	立野遺跡	14	金胎寺跡	19	鹿嶋遺跡		
5	舟山遺跡	10	岩比田遺跡	15	平山館跡	20	増田館跡		

Ⅲ 遺跡の概要

1 立地と調査履歴

南方遺跡⁽¹⁰⁾は、江南台地東部の崖線部から600m程入った、和田吉野川右岸の標高61m前後の平坦地に位置している(第4図)。

遺跡の北側は、植木沼・三角沼へと続く幅50m程の開析谷によって画されており、開析谷に沿って東側には、縄文時代中期の集落跡である東原遺跡(8:江南町:1995)が位置し、開析谷を挟んだ対岸には、埼玉県重要遺跡に指定されている権現坂遺跡(6:江南町:1995)、熊谷市指定史跡権現坂壇輪窠跡群(5:千代遺跡群発掘調査会:1998)が位置している。

遺跡の南側は、山神東遺跡⁽¹¹⁾・久保遺跡⁽¹²⁾と地形的に連続し、柴沼へと続く幅80m程の開析谷によって画されている。この開析谷の上流には、熊谷市指定史跡寺内古代寺院跡(13:江南町:1995)が位置している。

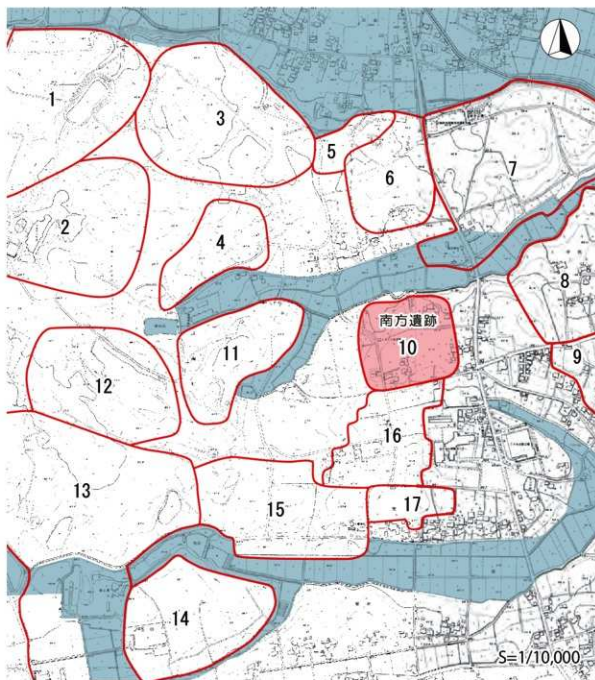
南方遺跡の中心は、土塁と堀が、東西約250m、南北約200mの範囲に確認されている(第5図)。最も良好に残る遺構は、南北方向に伸びる延長約60mの土塁と堀である。堀の幅は、土塁頂部の一端から約8m、深さ2.5mを測る。土塁の幅は、堀側端から約3m、高さ約2.5mを測る。この遺構の北側50m程の地点には、直線で連続しないが、幅約10mを越す堀が伸びており、虎口状の入口が位置していたものと推測されている。また、東側に並行して走る埼玉県道47号深谷東松山線は、かつて堀跡であったと言われている。これらの遺構の西側にも、点々と遺構が見られ、南辺の堀が約60m伸び、途中が宅地や墓地などで途切れ、さらに西へ約100mの地点で南辺から西辺にかかる堀が確認できる。西隅には、直径12m程の塚状の高まりがあり、頂部には上杉家の氏神を祀る祠が建てられている(図版6)。

現在、これらの遺構の東側には、旧家の小久保家が所在している。同家は、戦国時代に深谷上杉氏に仕え、太閤検地の際には案内役を務めたと伝えられ、文禄四年(1595)の検地帳を保有しており、千代村の名主を代々務めてきた。

また、これらの遺構の西側は、現在上杉館跡と伝えられている。天正18年(1590)豊臣秀吉(1537-1598)の関東攻略に際し、深谷城主上杉氏憲(-1637)は居城を明け渡し、嫡男憲俊(1579-1648)とともに信州へ移り久保田姓を名乗り、三男憲成(-1673)は、当地に居住していた小久保家を頼って移り住んだとの伝承が残っている。

昭和57年(1982)に、当時の江南村教育委員会が道路拡幅に伴う第1次発掘調査を実施している(江南町:1995 第5図)。約600㎡を調査した結果、縄文時代早期燃糸文期の住居跡2軒、中期加曾利E式期の住居跡1軒が検出されている。中世に属する遺構の検出は無く、渡来銭、陶磁器片が僅かに出土している。

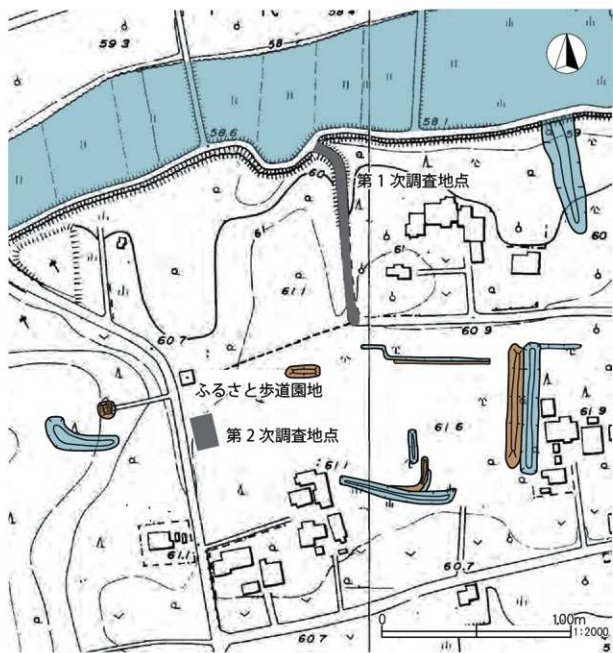
平成25年(2013)1月には、第1次発掘調査地点の北西100m程の地点で、今回報告の第2次発掘調査が熊谷市南方遺跡調査会によって行われている。



第4図 周辺の地形と遺跡

第2表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期	番号	遺跡名	時期
1	姥ヶ沢遺跡	縄文・弥生・古墳	7	宮下遺跡	縄文・平安	13	寺内遺跡	縄文・平安
2	西原遺跡	旧石器・縄文・平安	8	東原遺跡	縄文	14	中島遺跡	縄文・平安・中世
3	富士山遺跡	縄文・弥生・平安	9	萩山遺跡	縄文・平安	15	西遺跡	平安
4	北方遺跡	縄文	10	南方遺跡	縄文・中世	16	山神東遺跡	平安・中世
5	権現坂埴輪窯跡群	古墳	11	天神谷遺跡	縄文・中世	17	久保遺跡	中世
6	権現坂遺跡	縄文・古墳	12	山神遺跡	縄文・平安			



第5図 調査地点と館全体図

2 遺構と遺物の概要

検出された遺構は、小竪穴状遺構3、土坑1、溝跡3、掘立柱建物跡2、柱穴列2、ピット110である(第6図)。

小竪穴状遺構は、3基確認されている。第1号小竪穴状遺構は、長軸174cm、第2号小竪穴状遺構は、長軸192cm、第3号小竪穴状遺構は、長軸140cmを測る。遺物は出土していない。

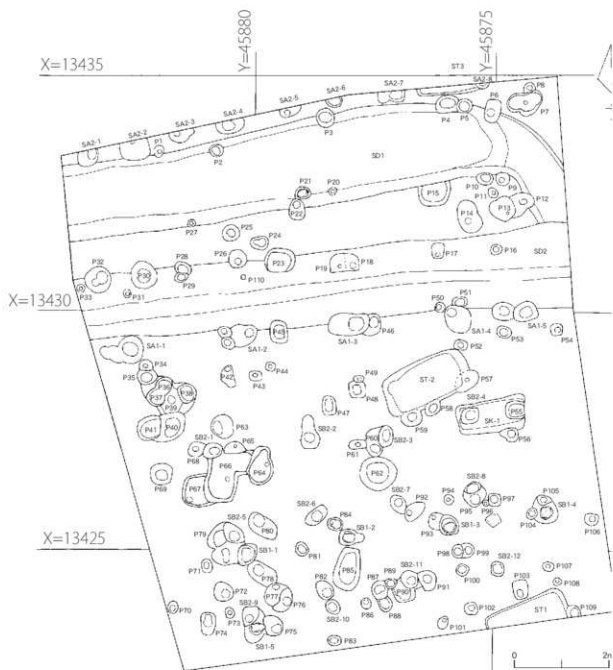
溝跡は、調査区北側で東西方向に2条確認されている。いずれも調査区外へと延びており、その規模は不明である。第1号溝跡は、断面鍋底形を呈しており、東側で第2号溝と重なっており、東から西へと掘り込みが深くなっている。第2号溝は、断面箱葉研形を呈しており、第1号溝とは逆に、西から東へと掘り込みが深くなっている。両溝の覆土下層より、鉄滓・砥石が出土している。

掘立柱建物跡は、調査区南側で2棟確認されている。第1号掘立柱建物跡は、南側および東側は、調査区外となり未調査となっている。(4間)×(2間)の掘立柱建物跡で、調査区内で確認される規模は、桁行7.5m、梁行2.2m、柱間は、桁行が2.1m、梁行1.5mを測る。柱穴は、基本的に隅丸形状の楕円形の掘方を呈し、坑底に柱の沈下を防ぐ扁平な川原石による礎板が設置されている。第2号掘立柱建物跡は、南側および西側が調査区外となり未調査となっている。(3間)×(2間)の掘立柱建物跡で、調査区内で確認される規模は、桁行3.7m、梁行2.4m、柱間は、桁行が西より1.3m—1.1m—1.2m、梁行が北より1.2m—1.2mを測る。柱穴は、基本的に隅丸形状の楕円形の掘方を呈している。遺物は、中世に属すると判断される土器小片が出土している。

柱穴列は、第1・2号溝に沿うように2列確認されている。第1号柱穴列は、第1号溝の北側に沿うように柱穴8基が確認されている。東西の調査区外へと柱穴列が続くと判断され、全体の規模は不明。第2号柱穴列は、第2号溝の南側に沿うように柱穴5基が確認されている。東西の調査区外へと柱穴列が続くと判断され、全体の規模は不明。2～4基の柱穴の重複が認められることから、複数回の建て替えがあったことが推測される。

ピットは、調査区のほぼ全面から確認されており、さらに調査区外に分布は広がると考えられるが、調査区内では建物跡等の想定される規則性を見出すことが出来なかった。ピットは、基本的に隅丸形状の楕円形の掘方を呈している。

これらの遺構は、出土遺物より判断して、中世松から近世初頭に属し、柱穴列および掘立柱建物跡の重複から、数時期にわたる遺構の変遷が推測される。



第6図 全測図

IV 検出された遺構と遺物

1 遺構と遺物

(1) 小竪穴状遺構

第1号小竪穴状遺構（第7図・図版4） 調査区南端の東側に位置する。遺構の南半分が調査区外に
かかり未調査となっている。第109号ピットに切られている。長軸174cm、壁高は北側で50cm、東側で
45cmを測る。床面は直床で平坦になっている。覆土は5層に分層され、自然堆積を示している。主軸
は、N-68°Wの方位を持つ。

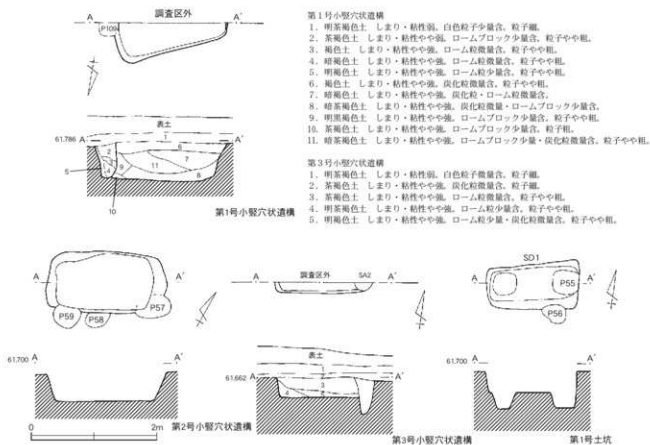
遺物 出土遺物なし。

時期 覆土より判断して中近世。

第2号小竪穴状遺構（第7図・図版4） 調査区中央やや東寄りに位置する。第57~59号ピットと重複
する。平面長方形を呈し、長軸192cm、短軸98cm、壁高は、北側で49cm、南側で48cmを測る。床面は直
床で平坦になっている。主軸は、N-66°Wの方位を持つ。

遺物 出土遺物なし。

時期 覆土より判断して中近世。



第3号小竪穴状遺構（第7図） 調査区北端の東側に位置する。遺構の大半が調査区外にかかり未調査となっている。第1号柱六列の第8号柱穴に切られる。長軸140cm、壁高は、南側で34cmを測る。床面は直床で、平坦になっている。覆土は3層に分層され、自然堆積を示している。主軸は、N-78°Wの方位を持つ。

遺物 出土遺物なし。

時期 覆土より判断して中近世。

(2) 土坑

第1号土坑（第7図） 調査区のはぼ中央に位置する。第2号掘立柱建物跡、第55・56号ビットに切られる。平面長方形を呈し、長軸149cm、短軸69cm、深さ32cmを測る。坑底は平坦になっている。

遺物 出土遺物なし。

時期 覆土より判断して中近世。

(3) 溝跡

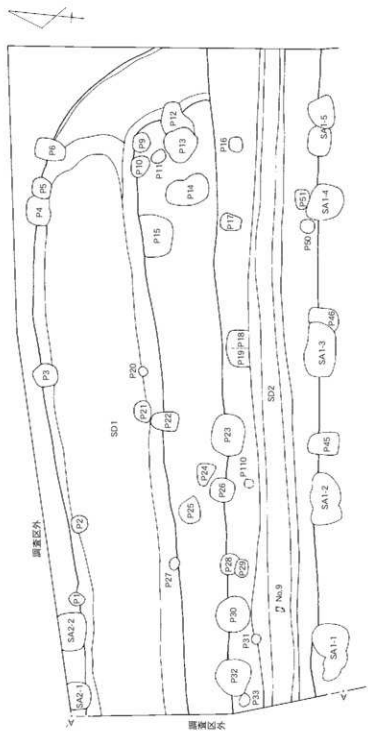
第1号溝跡（第8図・図版3・4・7） 調査区北側に位置する。北側に第1号柱六列が平行して接している。東側で南に折れ、第2号溝跡と接している。走行方向は、N-102°-Wである。西端は調査区外に延び、東端は、南へ掘り込みを浅くしながら曲がり、第2号溝につながる。検出長は、直線部で約9m、幅1.6mを測る。深さは、確認面より西側で0.31m、東側で0.26m、第2号溝と接する箇所0.22mを測り、62cmの落差をもって第2号溝の溝底に至る。西端と東端の比高差は0.15m程あり、水路と仮定した場合、東から西方向に向かって流水していたと考えられる。断面形は、鍋底形を呈している。

覆土は、7層に分層され、自然堆積を示している。第4層上面が硬く締まっており、埋没途中で一時期的道路として使用されていた可能性も想定される。第2号溝と重複する調査区東壁のセクションでは、新旧関係は確認できず、同時期に機能し埋没したものと判断される。

遺物（第16図・第3表・図版7） 遺物は、覆土下層より少量出土している。1は、ロクロ成形された、かわらけの口縁部破片。推定口径9.1cmを測る。2は、ロクロ成形された、かわらけの底部破片。推定底径6.6cmを測り、底部右回転糸切。3は、三足香炉の脚部。外面はヘラナデ。4は、火鉢の口縁部片。軟質の瓦質。5は、石碇の破片。石質は粘板岩。6・7は、片口鉢の破片。8は、凝灰岩製の砥石。この他、鉄滓が出土している（図版7）。

時期 出土遺物より判断すると、中世末から近世初頭と判断される。

第2号溝跡（第8図・図版3・4・7） 調査区北側に位置する。北側に第1号溝跡が平行し、東側で接している。南側に第2号柱六列が平行して接している。走行方向は、N-95°-Wである。両端とも調査区外に延びる。検出長は、10.5m、幅1.2~1.7mを測る。深さは確認面より西側で0.48m、東側で、1.0mを測る。西端と東端の比高差は0.17m程あり、水路と仮定した場合、第1号溝とは逆方向の西から東方向に向かって流水していたと考えられる。断面形は、箱築研形を呈している。



- 第1・2号溝跡
1. 明茶褐色土、しまり・粘状中強、白色粘土層を含む、粘土層。
 2. 茶褐色土、しまり・粘状中強、灰化粘層を含む、粘土中強。
 3. 茶褐色土、しまり・粘状中強、自然粘土層を含む、粘土中強。
 4. 褐色土、しまり・粘状中強、ロームブロックを含む、粘土中強。
 5. 明茶褐色土、しまり・粘状中強、ローム粘土層を含む、粘土中強。
 6. 褐色土、しまり・粘状中強、ローム粘土層を含む、粘土中強。
 7. 暗茶褐色土、しまり・粘状中強、ローム粘土層を含む、粘土中強。
 8. 明茶褐色土、しまり・粘状中強、ローム粘土層を含む、粘土中強。
 9. 暗茶褐色土、しまり・粘状中強、ローム粘土層を含む、粘土中強。
 10. 褐色土、しまり・粘状中強、灰化粘層を含む、粘土中強。
 11. 明褐色土、しまり・粘状中強、ローム粘層を含む、粘土中強。
 12. 茶褐色土、しまり・粘状中強、自然粘土層を含む、粘土中強。
 13. 茶褐色土、しまり・粘状中強、自然粘土層を含む、粘土中強。
 14. 暗褐色土、しまり・粘状中強、ローム粘層を含む、粘土中強。
 15. 暗褐色土、しまり・粘状中強、ローム粘土層を含む、粘土中強。
 16. 褐色土、しまり・粘状中強、ローム粘層を含む、粘土中強。



第8図 第1・2号溝跡

覆土は、7層に分層され、自然堆積を示している。

遺物 (第16図・第4表・図版7) 遺物は、覆土下層より少量出土している。9は、土師質の土鍋口縁部片。10は、鉄製釘。先端部を欠損している。現存長5.4cmを測る。11は、凝灰岩製の砥石。12は、瓦質土器蓋の肩部破片。焼成はやや不良で、在地産。

時期 出土遺物より判断すると中世末～近世初頭と判断される。

(4) 掘立柱建物跡

第1号掘立柱建物跡(第9図・図版5) 調査区の南側に位置する。南側および東側は、調査区外となり未調査となっている。(4間)×(2間)の掘立柱建物跡で、調査区内で確認される規模は、桁行7.5m、梁行2.2m、柱間は、桁行が2.1m、梁行1.5mを測る。主軸方位は、N-94°Wの方位を持つ。

なお、調査区外となるが、柱穴4の東側2.1m程の地点と、柱穴5の南側1.5m程の地点においてピンボールを地面に差し込み、礎板と思われる礎の存在を確認している。

柱穴は、基本的に隅丸形状の楕円形の掘方を呈し、坑底に柱の沈下を防ぐ扁平な河原石による礎板が設置されている。柱穴1は、長軸44cm、短軸42cm、深さ26cmを測り、坑底に幅21cm程の扁平な河原石を設置している。柱穴2は、長軸40cm、短軸32cm、深さ22cmを測り、坑底に幅24cm程の扁平な河原石を設置している。柱穴3は、長軸46cm、短軸38cm、深さ46cmを測り、坑底に幅24cm程の扁平な河原石を設置している。柱穴4は、長軸52cm、短軸42cm、深さ36cmを測り、坑底に幅25cm程の扁平な河原石を設置している。柱穴5は、長軸48cm、短軸38cm、深さ38cmを測り、坑底に幅22cm程の扁平な河原石を設置している。

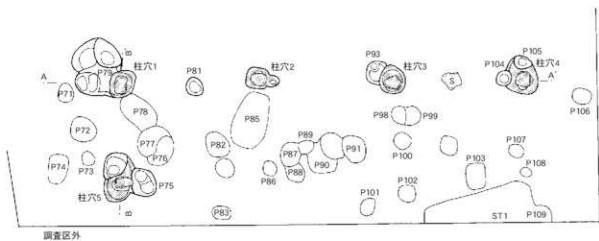
また、柱穴3と4の中間に幅28cm程の扁平礎が1確認されており、柱穴1と2の中間にビット81が存在している。

遺物 遺物は、土器小片が、柱穴1・4より土器小片が数点出土しているが、図示するには至らなかった。

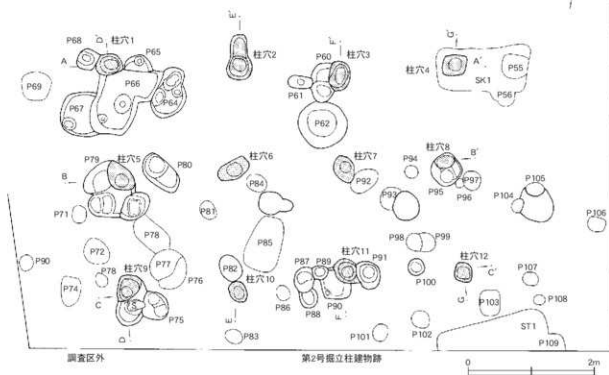
時期 出土遺物から中近世と判断される。

第2号掘立柱建物跡(第9図・図版6) 調査区の南側に位置する。南側および西側が調査区外となり未調査となっている。(3間)×(2間)の掘立柱建物跡で、調査区内で確認される規模は、桁行3.7m、梁行2.4m、柱間は、桁行が西より1.3m-1.1m-1.2m、梁行が北より1.2m-1.2mを測る。主軸方位は、N-96°Wの方位を持つ。

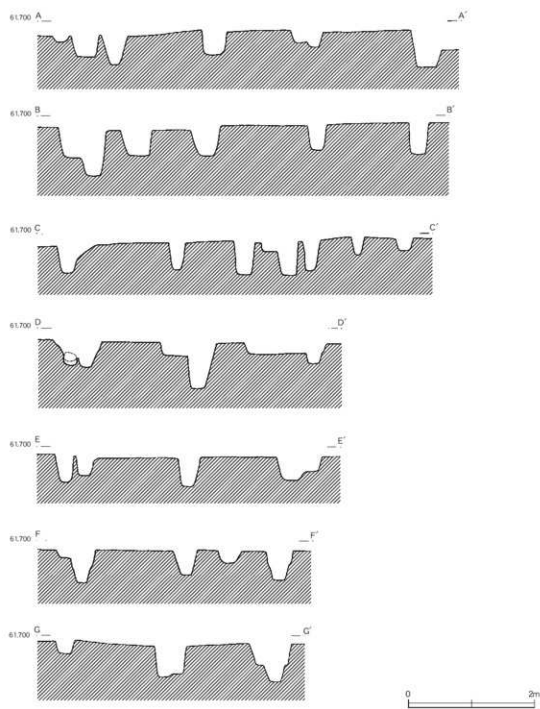
柱穴は、基本的に隅丸形状の楕円形の掘方を呈している。柱穴1は、長軸30cm、短軸23cm、深さ31cmを測る。柱穴2は、長軸48cm、短軸25cm、深さ32cmを測る。柱穴3は、長軸32cm、短軸21cm、深さ45cmを測る。柱穴4は、長軸43cm、短軸26cm、深さ60cmを測る。柱穴5は、長軸35cm、短軸24cm、深さ73cmを測る。柱穴6は、長軸36cm、短軸22cm、深さ43cmを測る。柱穴7は、長軸32cm、短軸20cm、深さ39cmを測る。柱穴8は、長軸46cm、短軸44cm、深さ47cmを測る。柱穴9は、長軸30cm、短軸19cm、深さ42cmを測る。柱穴10は、長軸22cm、短軸18cm、深さ44cmを測る。柱穴11は、長軸32cm、短軸24cm、深さ50cmを測る。柱穴12は、長軸20cm、短軸18cm、深さ20cmを測る。



第1号掘立柱建物跡



第9図 第1・2号掘立柱建物跡



第10图 第2号掘立柱建物跡断面図

遺物 遺物は、土器小片が、柱穴4・9より土器小片が数点出土しているが、図示するには至らなかった。

時期 出土遺物から中近世と判断される。

(5) 柱穴列

第1号柱穴列（第11図・図版3） 調査区の北壁際に、第1号溝に沿うように柱穴8基が確認されている。柱穴1は、長軸50cmのほぼ円形を呈し、深さ46cmを測る。柱穴2は、長軸52cmの隅丸方形を呈し、深さ53cmを測る。柱穴3は、長軸28cmの楕円形を呈し、深さ50cmを測る。柱穴4は、長軸61cmの楕円形を呈し、深さ48cmを測る。柱穴5は、長軸44cmの楕円形を呈し、深さ17.5cmを測る。柱穴6は、長軸47cmの楕円形を呈し、深さ75cmを測る。柱穴7は、長軸56cmの不整楕円形を呈し、深さ35cmを測る。柱穴8は、第3号小竪穴を切っている。長軸32cmのほぼ円形を呈し、深さ56cmを測る。

柱穴1-2、2-3、3-4間の距離は約1.0m、柱穴4-5間の距離は1.3m、柱穴5-6、6-7間の距離は約1.0m、柱穴7-8間の距離は約2.0mとなっている。柱穴7-8間の距離が長い、調査区壁際にあたり、第3号小竪穴が存在したことにより、柱穴が確認できなかった可能性があり、柱穴4-5間以外は柱間約1.0mであった可能性が高い。N-102°Wの方位を持ち、調査区外へと柱穴列が続くと判断され、全体の規模は不明。

遺物 遺物は、土器小片が、柱穴2・3より土器小片が数点出土しているが、図示するには至らなかった。

時期 出土遺物から中近世と判断される。

第2号柱穴列（第11図・図版3） 第2号溝の南側に沿うように柱穴5基が確認されている。柱穴1は、東より長軸61cm、34cm、24cmのほぼ円形を呈する3基の柱穴が重複しており、深さ33cm、20cm、22cmを測る。柱穴2は、東より長軸41cm、43cm、32cm、30cmの円形を呈する4基の柱穴が重複しており、深さ41cm、35cm、21cm、31cmを測る。柱穴3は、東より長軸50cm、48cm、42cmの円形を呈する3基の柱穴が重複しており、深さ32cm、37cm、40cmを測る。柱穴4は、2基の柱穴が重複しており、長軸58cmのほぼ円形を呈する。深さ65cm、61cmを測る。柱穴5は、東より長軸52cm、長軸53cmの楕円形を呈する2基の柱穴が重複しており、深さ54cm、30cmを測る。

柱穴1-2、2-3、3-4間の距離は約2.4m、柱穴4-5間の距離は約1.2mとなっている。N-96°Wの方位を持ち、調査区外へと柱穴列が続くと判断され、全体の規模は不明。2~4基の柱穴の重複が認められることから、複数回の建て替えがあったことが推測される。

遺物 遺物は、土器小片が、柱穴3・4より土器小片が数点出土しているが、図示するには至らなかった。

時期 出土遺物から中近世と判断される。

(6) ビット (第12～15図・第6表・図版6)

ビットは、110基、調査区のほぼ全面に確認され、さらに調査区外に分布は広がると考えられるが、調査区内では建物跡等の想定される規則性を見出すことが出来なかった。ビットは、基本的に隅丸方形の楕円形の掘方を呈している。規模等の各ビットの属性は第6表にまとめた。

2 遺構外出土遺物 (第16図・第5表・図版7)

遺構外出土遺物の出土量は少なく、大半の遺物は図示するには至らなかった。

第16図13は、刃部の一部のみ残存する黒曜石製の尖頭器。14は、片口鉢の口縁部片。15は、半胴甕。1条の沈線が巡る。灰釉が掛り、細かい貫入が入る。18世紀に属する瀬戸美濃産陶器。

第3表 第1号溝跡出土遺物観察表

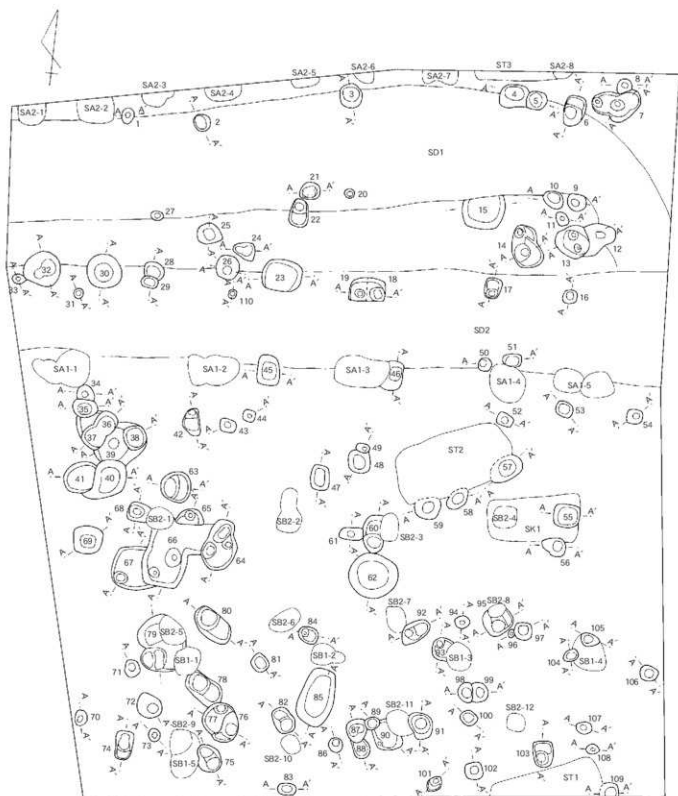
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
1	かわらけ	(9.1)	(1.8)	-	ABEJ	5YR 5/4	A	口縁部30%	体部口クロ・見込ナデ整形。在地。
2	かわらけ	-	(1.5)	(6.6)	ABEI	7.5YR 5/3	B	底部20%	見込ナデ整形。底部右回転糸引。在地。
3	香炉	-	(2.2)	-	ABJ	(外) N 4/0 (内) 10YR 5/2	B	胴部破片	外面ヘラナデ
4	火鉢	-	-	-	ABDG	5YR 5/4	B	口縁破片	瓦質(軟質)
6	片口鉢	-	-	-	ABDGI	10YR 4/1	B	口縁破片	在地
7	片口鉢	-	-	-	ABDN	2.5YR 5/2	B	破片	在地
番号	器種	最大長	最大幅	最大厚	重さ	色調	焼成	残存率	備考
5	甕	(5.5)	(3.0)	(0.6)	9.9g	N 4/0			粘板岩製
8	砥石	(5.2)	(3.2)	2.6	37.5g	7.5YR 5/2		30%	凝灰岩製

第4表 第2号溝跡出土遺物観察表

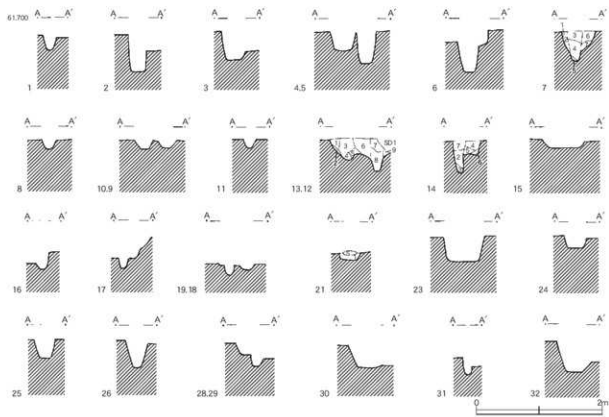
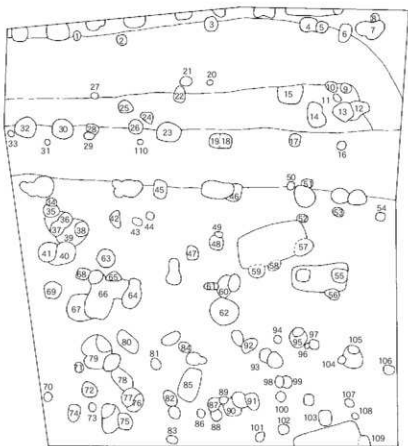
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
9	土鍋	-	-	-	BDEGIN	5YR 5/4	B	口縁破片	土師質
12	蓋	-	-	-	ABDEGIN	2.5YR 4/1	B	胴部破片	
番号	器種	最大長	最大幅	最大厚	重さ	色調	焼成	残存率	備考
10	釘	(5.4)	1.0	0.5	8.3g	-		30%	
11	砥石	(6.3)	4.6	4.3	150g	10YR 5/2		30%	凝灰岩製

第5表 遺構外出土遺物観察表

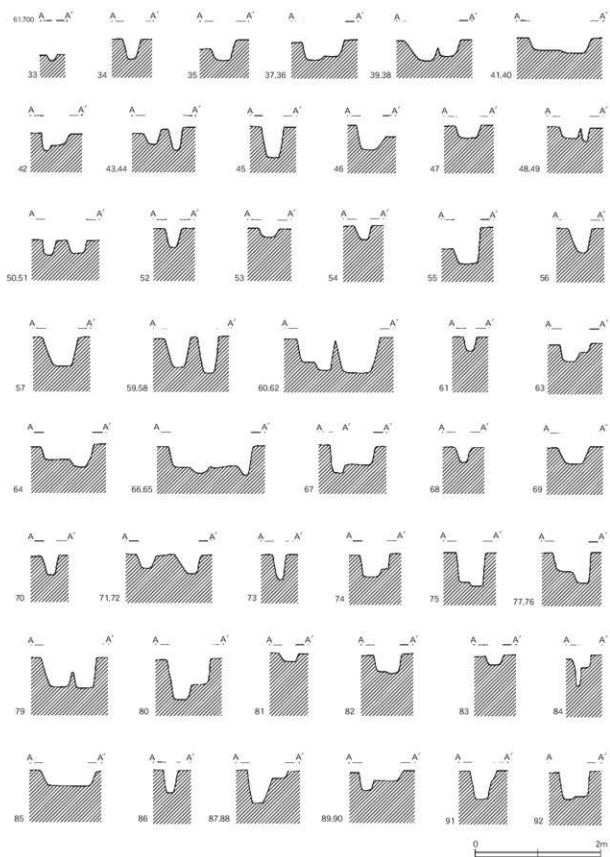
番号	器種	最大長	最大幅	最大厚	重さ	色調	焼成	残存率	備考
13	尖頭器	(1.9)	(2.5)	0.7	2.7g	-			黒曜石製
番号	器種	口径	器高	底径	胎土	色調	焼成	残存率	備考
14	片口鉢	-	-	-	ABDG	7.5YR 5/3	B	口縁破片	在地
15	半胴甕	-	(5.0)	-	-	(外) 5Y 6/2 (内) 10YR 5/3	A	胴部20%	灰釉 瀬戸美濃産



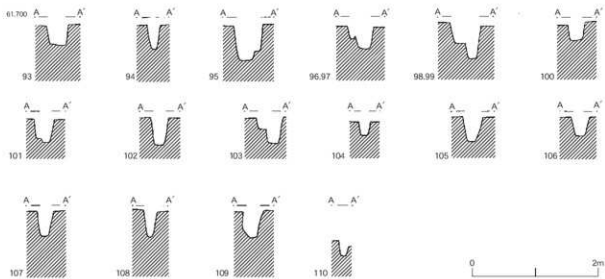
第12図 ビット平面図



第13図 ビット配置図・断面図(1)



第14図 ビット断面図(2)



第7号ビット

1. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、ローム形多量、船子中後部。
2. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、ローム形少量、船子中後部。
3. 明炭鋼土 しまり・船体中後部、ロームプロトコク難着、船子中後部。
4. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、溝状形難着、船子中後部。
5. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、ローム形多量、船子中後部。
6. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、ロームプロトコク難着。
7. 明炭鋼土 しまり・船体中後部、ローム形少量、船子中後部。

第12・13号ビット

1. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、ローム形多量、船子中後部。
2. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、ローム形多量、船子中後部。
3. 明炭鋼土 しまり・船体中後部、ローム形難着、船子中後部。
4. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、溝状形難着、船子中後部。
5. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、ローム形多量、船子中後部。
6. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、溝状形、ローム形難着、船子中後部。
7. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、ローム形難着、船子中後部。
8. 明炭鋼土 しまり・船体中後部、溝状形難着。

第14号ビット

1. 明炭鋼土 しまり・船体中後部、ロームプロトコク難着、船子中後部。
2. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、ローム形難着、船子中後部。
3. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、溝状形難着、船子中後部。
4. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、ロームプロトコク多量、船子中後部。
5. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、ロームプロトコク、ローム形多量、船子中後部。
6. 明炭鋼土 しまり・船体中後部、ローム形多量、船子中後部。

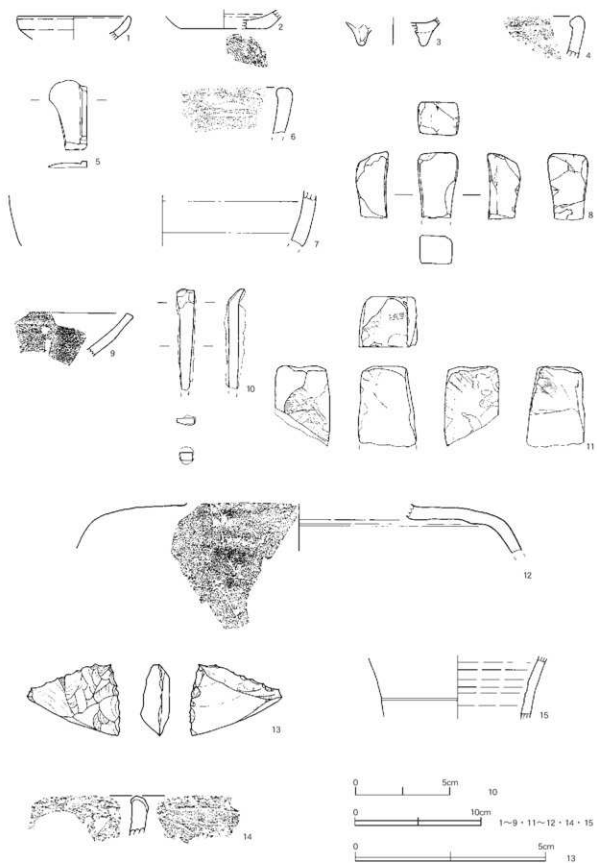
第21号ビット

1. 炭素鋼土 しまり・船体中後部、ローム形少量、船子中後部。

第15図 ビット断面図(3)

第6表 ビット計測表

番号	平面形	長(m)	短(m)	深(m)	備 考	番号	平面形	長(m)	短(m)	深(m)	備 考
P01	楕円形	26.0	20.0	24.0		P66	不整形	41.0	30.0	39.0	第1号土坑と重複
P02	円形	28.0	27.0	59.0		P67	楕円形	54.0	36.0	47.0	第2号小窓穴状遺構と重複
P03	円形	40.0	36.0	35.0		P68	楕円形	42.0	23.0	59.0	第2号小窓穴状遺構と重複
P04	不整形	46.0	39.0	29.0	P05と重複	P69	円形	43.0	32.0	50.0	第2号小窓穴状遺構と重複
P05	円形	32.0	30.0	50.0	P04と重複	P60	楕円形	60.0	28.0	48.0	P61・62・第2号独立柱建物跡と重複
P06	楕円形	50.0	34.0	67.0		P61	楕円形	40.0	20.0	23.0	P60と重複
P07	不整形	79.0	48.0	47.0	P08と重複	P62	円形	80.0	70.0	55.0	P60と重複
P08	円形	23.0	21.0	15.0	P07と重複	P63	円形	50.0	48.0	30.0	
P09	円形	31.0	25.0	13.0		P64	不整形	83.0	39.0	37.0	P66と重複
P10	楕円形	45.0	38.0	14.0		P65	不整形	44.0	28.0	48.0	P66と重複
P11	楕円形	25.0	19.0	15.0		P66	不整形	104.0	92.0	42.0	P64-65-67-第2号独立柱建物跡と重複
P12	不整形	46.0	40.0	51.0	P13と重複	P67		70.0	47.0	45.0	P66と重複
P13	不整形	53.0	51.0	34.0	P12と重複	P68		34.0	30.0	23.0	第2号独立柱建物跡と重複
P14	不整形	71.0	41.0	50.0		P69	方形	47.0	43.0	28.0	
P15	方形	69.0	50.0	13.0		P70	楕円形	24.0	18.0	32.0	
P16	方形	23.0	22.0	27.0		P71	楕円形	29.0	22.0	34.0	
P17	不整形	33.0	25.0	30.0		P72	楕円形	44.0	40.0	31.0	
P18		36.0	26.0	9.0	P19と重複	P73	円形	21.0	20.0	40.0	
P19		36.0	30.0	20.0	P18と重複	P74	不整形	46.0	27.0	36.0	
P20	円形	17.0	15.0	-		P75	不整形	50.0	43.0	54.0	第1号独立柱建物跡と重複
P21	円形	34.0	27.0	12.0		P76	不整形	54.0	29.0	49.0	P77と重複
P22	不整形	45.0	29.0	-		P77	不整形	54.0	30.0	27.0	P76・78と重複
P23	方形	65.0	51.0	42.0		P78	此方形	67.0	39.0	-	P78・第1号独立柱建物跡と重複
P24		38.0	28.0	18.0		P79	不整形	90.0	65.0	47.0	第1・2号独立柱建物跡と重複
P25	不整形	43.0	36.0	30.0		P80	楕円形	70.0	38.0	65.0	
P26	円形	40.0	37.0	44.0	P29と重複	P81	方形	30.0	24.0	13.0	
P27	楕円形	20.0	15.0	-	P28と重複	P82	楕円形	44.0	32.0	31.0	
P28	円形	34.0	24.0	19.0		P83	楕円形	29.0	19.0	15.0	
P29	楕円形	28.0	20.0	20.0		P84	楕円形	33.0	25.0	50.0	
P30	円形	56.0	54.0	35.0		P85	楕円形	91.0	54.0	22.0	
P31	円形	17.0	17.0	27.0		P86	円形	24.0	22.0	38.0	
P32	不整形	61.0	58.0	48.0		P87	不整形	39.0	32.0	52.0	P88・89と重複
P33	楕円形	22.0	16.0	9.0		P88	楕円形	36.0	26.0	12.0	P87と重複
P34	円形?	30.0	23.0	32.0	P35と重複	P89	円形	24.0	20.0	29.0	P87・90と重複
P35	楕円形	40.0	29.0	33.0	P34と重複	P90	方形	51.0	44.0	15.0	P88・第2号独立柱建物跡と重複
P36		31.0	30.0	27.0	P37・39と重複	P91	不整形	47.0	34.0	45.0	第2号独立柱建物跡と重複
P37		38.0	35.0	28.0	P36・39と重複	P92	楕円形	51.0	30.0	44.0	第2号独立柱建物跡と重複
P38	方形	40.0	36.0	27.0	P39と重複	P93	円形	36.0	23.0	32.0	第1号独立柱建物跡と重複
P39	不整形	115.0	86.0	31.0	P36~38・40と重複	P94	円形	24.0	20.0	38.0	
P40	不整形	80.0	57.0	24.0	P39・41と重複	P95	方形	47.0	47.0	52.0	第2号独立柱建物跡と重複
P41	円形?	60.0	50.0	19.0	P40と重複	P96	楕円形	14.0	10.0	20.0	P97と重複
P42	不整形	45.0	29.0	30.0		P97	方形	29.0	27.0	36.0	P96と重複
P43	方形	47.0	20.0	24.0		P98	楕円形	32.0	24.0	33.0	P99と重複
P44	方形	20.0	20.0	38.0		P99	円形	32.0	25.0	31.0	P98と重複
P45	方形	50.0	36.0	50.0		P100	方形	26.0	23.0	30.0	
P46	方形?	48.0	25.0	32.0	第1号柱穴列と重複	P101	方形	24.0	22.0	36.0	
P47	長方形	40.0	30.0	20.0		P102	方形	28.0	28.0	43.0	
P48	長方形	38.0	35.0	18.0	P49と重複	P103	不整形	42.0	31.0	41.0	
P49	楕円形	21.0	15.0	21.0	P48と重複	P104	楕円形	25.0	18.0	21.0	第1号独立柱建物跡と重複
P50	円形	22.0	22.0	24.0		P105	楕円形	31.0	21.0	40.0	第1号独立柱建物跡と重複
P51	不整形	31.0	21.0	21.0	第1号柱穴列と重複	P106	方形	29.0	24.0	30.0	
P52	長方形	28.0	20.0	31.0		P107	楕円形	27.0	20.0	40.0	
P53	方形	28.0	24.0	14.0		P108	方形	18.0	17.0	44.0	
P54	方形	25.0	24.0	22.0		P109	方形	30.0	24.0	38.0	第1号小窓穴状遺構と重複
P55	方形	41.0	38.0	58.0	第1号土坑と重複	P110	方形	8.0	6.0	25.0	



第16圖 出土遺物

V 調査のまとめ

今回の発掘調査によって検出された遺構・遺物は、主体となるのは中世から近世である。調査は、携帯電話無線基地局の建設に伴う144㎡であるため、未知な部分が多い。

本遺跡は、以前より戦国時代末から近世にかけての上杉館跡の伝承があったが、今回の調査で初めて館跡の一部を確認することができた。伝承では、天正18年（1590）に、豊臣秀吉の関東攻略に際し落城した深谷城から、城主上杉氏憲氏の三男憲成氏が、当地に居住していた小久保氏を頼って移り住んだとされている。今回の調査で確認された堀・掘立柱建物跡等の館跡関連遺構は、出土遺物から帰属される年代により、その伝承を概ね裏付けるものとなった。

現状で、東西300m、南北200mの範囲で、土塁・堀等の遺構が点々と確認されるが、館の全体像は不明である（第5図）。今回の調査で確認された2条の溝跡は、現状の地形観察では確認することが出来ないものであった。数次に渡る遺構の変遷、または後世の耕作等の土地利用の結果、埋め戻されたり削平されたものと判断される。

第1号溝跡は、覆土中層に硬化面があり、人為的な埋戻しが想定される。第2号溝は、断面箱葉型を呈し、水路と仮定した場合の水流は東方向に流れる構造になっていた。一方、第1号溝は、断面鍋底型を呈し、水路と仮定した場合の水流は西方向に流れる構造になっていた。形態の異なる2条の溝であるが、切り合い関係は重複する東側で確認することができず、同時期に機能していたと判断される。掘り込みの浅い第1号溝は、第2号溝の水量調整機能を担っていた可能性が考えられる。この第1号溝の流れる西側40m程の地点には、池状の窪地が現状で確認でき、そこへ導水した水路の可能性が推測される。2条の溝の脇にはそれぞれ柱穴列が確認され、柵列または築地塀のような施設があったことが想定できる。

ピットは、調査区内のほぼ全面から確認され、2棟の掘立柱建物跡を想定できたが、その他のものについては建物を想定できる規則性を見出すことが出来なかった。調査区外にも当然その分布は広がると考えられ、数次に渡る建物の変遷があったことが推測される。第1号掘立柱建物跡は、坑底に柱の沈下を防ぐ扁平な川原石による礎板が設置されており、ある程度重量のある上屋構造を持つ建物が建てられていたことが推測される。

出土土器は、小片であり、詳細な帰属時期を判断することが難しい。第1号溝出土のかわらけ（第16図2）は、ロクロ回転が右方向であり、この技法は17世紀末には見られなくなることが指摘されている（1998：小川）。同溝出土の火鉢（第16図4）は、軟質の瓦質であり、17世紀代に比定できる。その他の遺物については、概ね中世末から近世初頭の範囲に収まると判断される。2条の溝跡より鉄滓・砥石が出土しており、小鍛冶による鉄生産が遺跡内で行われていたことが推測され、硯の出土はある程度の身分の者が居住していたことが推測される。

以上、今回の調査で確認された事項から、南方遺跡の性格・内容について検討を行ってみた。現状では資料的制約から推測の域を出ないものが多く、今後の資料の増加を待って改めて検討し、遺跡の詳細が明らかになることを期待したい。

引用・参考文献

- 岩比田遺跡調査会 1983『岩比田』
- 小川 望 1998「近世江戸出土の土器類」『江戸と周辺遺跡』江戸遺跡研究会第11回大会 江戸遺跡研究会
- 川本町遺跡調査会 1999『高山館跡』川本町遺跡調査会報告書第4集
- 川本町遺跡調査会 2003『高山館跡（第6次）・如意南遺跡（第3次）』川本町遺跡調査会報告書第7集
- 川本町遺跡調査会 2003『百済木遺跡』川本町遺跡調査会報告書第8集
- 川本町遺跡調査会 2003『本田城・上本田遺跡（第7次）』川本町遺跡調査会報告書第9集
- 熊谷市合羽山遺跡調査会 2009『合羽山遺跡』
- 江南町 1995『江南町史』資料編1 考古 江南町史編さん委員会
- 江南村教育委員会 1972『埋蔵文化財の発掘調査』江南村文化財調査報告書第1集
- 江南町教育委員会 1989『塩西遺跡Ⅱ』江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第9集
- 江南町教育委員会 2002『寺内遺跡範囲確認調査関連報告書』江南町埋蔵文化財発掘調査報告書第13集
- 江南町千代遺跡群発掘調査会 1993『千代遺跡群発掘調査概報』
- 江南町千代遺跡群発掘調査会 1998『千代遺跡群—弥生・古墳時代編—』埼玉県江南町千代遺跡群発掘調査報告書2
- 埼玉県遺跡調査会 1974『下新田遺跡・荒神脇遺跡・熊野遺跡発掘調査報告書』
- 埼玉県教育委員会 1972『鹿島古墳群』
- 埼玉県教育委員会 1980『舟山遺跡』
- 埼玉県教育委員会 1988『埼玉の中世城館跡』
- 埼玉県立歴史資料館 1985『埼玉の中世城館跡』
- 比企団体研究グループ 1991年「比企丘陵および岩殿丘陵の構造発達概観」『地研専報』38号
- 寄居町教育委員会 1997『町内遺跡5』寄居町文化財調査報告第19集

写 真 图 版



航空写真（平成4年11月2日撮影）

図版 2



調査区全景（南より）



調査風景（南より）



第1号溝・第1号柱穴列完掘状態（西より）



第1号溝・第1号柱穴列完掘状態（東より）



第2号溝・第2号柱穴列完掘状態（西より）



第2号溝・第2号柱穴列完掘状態（東より）



第1・2号溝完掘状況（西より）



第2号溝土層堆積状況（西面）



第2号溝完掘状況（東より）



第1号小竪穴状遺構



第2号小竪穴状遺構



第1号掘立柱建物跡（西より）



柱穴 1



柱穴 2



柱穴 3



柱穴 4



柱穴 5



柱穴 6



ピット群完掘状況（北西より）



作業状況



表土剥ぎ作業状況



付近に残る塚



付近に残る土塁と堀



報告書抄録

ふりがな	みなみかたいせきⅡ							
書名	南方遺跡Ⅱ							
副書名	熊谷市南方遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	—							
編集者名	森田安彦							
編集機関	埼玉県熊谷市南方遺跡調査会							
所在地	〒360-8601熊谷市宮町2-47-1TEL048-524-1111							
発行年月日	西暦2014（平成26）年3月25日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ("°")	東緯 ("°")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
みなみ 南 方 遺 跡	くまがやしせんたい 熊谷市千代441番6	11202	65-015	36° 07' 11"	139° 19' 25"	20130115 ～ 20130128	144	携帯電話 無線基地 局
所収遺跡名	種 別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特 記 事 項			
南 方 遺 跡	館 跡	中 近 世	溝跡 2条 掘立柱建物跡 2棟 小竪穴状遺構 3基	土器 鉄滓	中世～近世の館跡に関連する掘立柱建物跡・溝跡等を確認。			

埼玉県熊谷市南方遺跡調査会埋蔵文化財調査報告書

南方遺跡Ⅱ

平成26年3月25日発行

発行／埼玉県熊谷市南方遺跡調査会

印刷／朝日印刷工業株式会社